

# 知的障害児（者）のスポーツ・レクリエーション活動と 生活の質（QOL）に関する研究

— 性別による活動群と非活動群からの比較検討 —

## A Study on the sports and recreational activities of people with mental disabilities and their quality of life (QOL)

— comparing by sex participating and non-participating groups

金子 勝 司

Shoji Kaneko

南 條 正 人

Masato Nanjyo

### 要約

本研究では、宮城県仙南地区の会話によるコミュニケーションが可能で、質問の内容に対して適切な言語理解及び表現ができる療育手帳 B の軽度知的障害児（者）153 名を調査対象とし、「日本版 QOL 質問紙簡易版」を用いて知的障害児（者）本人へインタビュー調査を実施した。性別によるスポーツ・レクリエーション活動の活動群と非活動群を比較し、知的障害児（者）の生活の質（QOL）を分析した。また、知的障害児（者）のスポーツ・レクリエーション活動の実態を調査分析した。

主な結果は、次のようである。

- ①スポーツ・レクリエーション活動の活動群と非活動群の活動満足度は、男性女性とも非活動群よりも活動群が高く、男性で 1%水準、女性で 5%水準の有意差が認められた。
- ②スポーツ・レクリエーション活動を支援する組織が少ないという実態が明らかとなった。
- ③性別による活動群と非活動群の生活の質（QOL）において、男性女性とも活動群が非活動群よりも高い数値が示され、統計的にも有意差が認められた。

**キーワード：**知的障害児、スポーツ・レクリエーション、QOL

## 目次

- I はじめに
- II 研究方法
  - 1 調査対象
  - 2 調査方法
  - 3 調査内容
    - 1) 基本的属性
    - 2) スポーツ・レクリエーション活動
    - 3) 生活の質 (QOL)
- III 結果及び考察
  - 1 性別による活動群と非活動群の特性
  - 2 健康状態
  - 3 体力
  - 4 活動群における実施活動種目
  - 5 活動満足度
  - 6 活動する際の友人
  - 7 情報源
  - 8 支援組織の有無
  - 9 生活の質 (QOL)
    - 1) 生活満足度
    - 2) 社会参加・活動
    - 3) 自立・自由度
- IV おわりに
- 参考文献・引用文献

### I はじめに

現代社会の特徴の一つとして、人口構造の高齢化があげられる。わが国における、65歳以上の高齢者の割合は、2004年までは19.5%であったが、2025年には、30%程度まで上昇すると予測されている。この高齢化の問題は、知的障害者でも同様である。知的障害者をはじめ発達障害がある人たちの生命予後は、国民の平均寿命に比べれば短い、時代とともに延びている。特にダウン症の平均寿命に関しては、今日では50歳ないし60歳代を迎える人も珍しくない(正木、1999)。知的障害者の入所更生施設の利用者のうち、60歳以上の者の比率は1985年には2.3%が、1999年には8.8%に上る。また、1999年

度の「日本知的障害福祉協会」の調査によると、更生施設 1068 ケ所のうち、高齢化が問題となっている施設は 763 ケ所で、全体の 71.4%であったと報告している（発達障害白書、2002）。

これまで、知的障害児（者）を対象として、医療・高齢者福祉の領域では生活の質（QOL）の測定の試みがなされている。ここでは、知的障害児（者）に関しては、大きな関心が向けられているものの、定量的に測定するという試みはあまりされていない。日本における研究に着目した場合、河東田らの（1999）「知的障害者の生活の質に関する日瑞比較研究」があり、会話によるコミュニケーションがある程度可能な知的障害者を対象とした生活の質（QOL）の調査を実施している。その結果、入所施設のような本人の意思や主体性が生かしくい生活形態では、生活の質（QOL）の評価が著しく低いという実態を明らかにしている。末光ら（2000）の「高齢知的障害者の日本版 QOL 質問紙簡易版に関する研究」においては、Schalock&Keith（1993）が開発した知的障害者生活の質の質問紙を用いて、高齢知的障害者の生活の質（QOL）を調査している。具体的には、入所施設利用者の本人回答と通所施設利用者の本人回答、そして入所施設利用者の本人回答と職員回答との比較を実施している。その結果、入所施設利用者の本人回答と職員回答の比較において、5%水準で有意な差が認められたと報告している。

南條と仲野（2004）の「障害児（者）の生活の質（QOL）に関する研究—知的障害児（者）の居住形態に着目して—」においては、入所施設、グループホーム、家族と同居という居住形態の異なる知的障害児（者）の生活の質（QOL）を明らかにする研究を実施している。その結果、グループホーム居住者の満足度が、入所施設居住者および家族同居者と比較して有意に高かったと報告している。

障害者の余暇活動についての研究では、これまでのレクリエーション活動の経験が少ないため、選択の可能性が限られているとされている。また、Firth と Rapley（1990）は、障害者が参加する活動は一人で行う活動が多いことを発見し、障害者の活動を制限しているのは能力ではなく、機会の欠如だと指摘している。また、富安（1990）は、地域の中でのレクリエーション活動に関して、一般的にレクリエーション活動には障害のある人々だけが集められていると指摘している。

このような研究の中で、知的障害児（者）を対象にアプローチされてはいるものの、生活の質（QOL）へのスポーツ・レクリエーション活動（註1）の影響という視点からのアプローチした研究は少ない。しかし、中澤（2002）は、「多くの障害者が健常者に比肩する余命を有する今日、既に障害が定着し医療的介入を必要としない障害者（すなわち患者ではない）が、老後の健康および体力を維持し、生活の質（QOL）を維持する上で、定期的な身体運動が必要とされている理由は自明であろう」と述べている。また、野村（2004）は、「障害のある無しに関わらず自らの責任と努力で自身の生活の質を高めるた

めには、レクリエーション・プログラムへの参加が極めて重要な側面である」と述べている。

なお、右田(1995)は、福祉における理論化において、あくまでも「わずらうこと・障害をもって生きること」を経験する主体としての「当事者」の視点に立ちながら、日常における主観的な意味づけをとらえていくことを出発点とすべきであると述べている。

そこで、本研究は、知的障害児(者)を対象とした主観的測定による生活の質(QOL)を測定した。その生活の質(QOL)をスポーツ・レクリエーション活動の活動群と非活動群に区分し、それらを比較することによって、知的障害児(者)の生活の質(QOL)に及ぼすスポーツ・レクリエーション活動の影響を明らかにすることを目的とした。

## II 研究方法

### 1 調査対象

本研究のサンプルを得るため、宮城県仙南地区における在宅知的障害者、知的障害者入所施設、知的障害者通所施設、グループホーム利用者及び養護学校高等部に調査の協力を依頼した。そして、協力が得られた施設、学校において調査を実施した。次に、知的障害児(者)を対象に実際に生活の質(QOL)を測定する際に問題となるのは、言語理解及び表出言語である。本研究では、先行研究を参考に、会話によるコミュニケーションが可能で、質問の内容に対して適切な言語理解及び表現ができる療育手帳Bの軽度知的障害児(者)をサンプルとし、施設職員並びに学校職員により抽出された者を調査対象とした。

施設職員、学校職員に抽出された171名のうち、質問に対して適切な言語理解ができていると判断された153名を本研究の対象とした。なお、回収率は89.5%(153件)である。

なお、本研究では、ACSM(アメリカ・スポーツ医学会)の基準を参考にし、「一回の活動を20分以上、週に3回以上」を活動群と規定した。

### 2 調査方法

調査方法は、対面の個人面接法を採用し、統一した質問紙を用いて著者が質問して、必要な項目だけを対象者に提示する手法をとった。施設職員及び学校職員により抽出された対象者には、本研究の主旨や面接内容の説明を行い、承諾を得た対象者と面接日時を決定した。なお面接時には、守秘義務の説明を行った後に面接を開始した。面接時間は1人あたり30分から40分であった。

個人面接法においては、面接者と対象者間のラポール形成が重要であると言われている。

る。そこで、面接者である著者は、対象者が普段の生活の中で多くの時間を費やしている施設または学校に出向き、その形成に努めた。そうすることによって、対象者が緊張せずに話すことのできる環境づくりに配慮した。また、面接者の考え方を主張し、対象者の意見を偏向させないように注意した。

### 3 調査内容

#### 1) 基本的属性

性別・年齢・居住形態・就寝部屋・健康状態・体力

#### 2) スポーツ・レクリエーション活動

定期活動の有無・定期活動の種目名・活動際の友人の有無・活動満足度・情報源  
支援組織の有無

#### 3) 生活の質 (QOL)

生活の質 (QOL) の考え方は、1960 年後半の欧米、とくにアメリカの公民権運動や患者の権利運動から発展してきたが、生活の質 (QOL) の概念は、一定の基準があるものではなく、個々の満足感や幸福感などの、その人の生活を包括的にとらえられているようである。

知的障害児 (者) に関する生活の質 (QOL) も同様に、生活の質 (QOL) を構成する要素は障害の有無に関係ないと考える。また、生活の質 (QOL) は多面的な概念が構成されているものであり、個々が置かれている環境や状況の因子による影響を受けるものと思われる、その因子は、①健康、②生活環境、③家族、④人間関係、⑤教育、⑥労働、⑦余暇の領域であると考えられる。

理解やコミュニケーションが困難な知的障害児 (者) に対しても、生活の質の基準は、知的障害児 (者) が生活に対してどのように感じているかが大事であると考えられる。そこで、本研究では、Schalock&Keith (1993) が知的障害者の生活の質 (QOL) を主観的測定するために作成した質問紙を参考に、末光ら (2000) が開発した「日本版 QOL 質問紙簡易版」を本研究でも用いた。その簡易版は、「生活満足度」、「社会参加・活動」、「自立・自由度」という 3 つの領域から構成されている。「生活満足度」は、①日常生活の楽しみや娯楽②健康③住環境④家族という内容の 13 項目である。「社会参加・活動」は、①毎日の作業や活動②地域参加③友人という内容の 8 項目である。「自立・自由度」は、①決定権②制約③自分の意見という内容の 9 項目であり、全部で 30 項目から構成されている。

### Ⅲ 結果及び考察

#### 1 性別による活動群と非活動群の特性

表1には、性別による対象者の活動群と非活動群の特性を示してある。男性の総数95名の内、活動群が62名(65%)、非活動群が33名(35%)と活動群が多い。女性では、総数58名の内、活動群が20名(34%)、非活動群が38名(66%)と非活動群が多かった。年齢別では「10歳代」、「20歳代」を中心とした分布となっている。居住形態は、すべての群においても「親同居」が一番多く、次いで、グループホーム、施設入所の順である。就寝部屋については、男性の活動群を除いて「個室」が一番多い比率であった。男性の活動群では、「4人」という回答が一番多い比率であった。

表1. 性別による実施の有無と主な特性

	男 性		女 性		
	活 動 群	非活動群	活 動 群	非活動群	
総 数	62	33	20	38	
年 齢	10代	40 (65.5)	23 (69.7)	13 (65.0)	29 (76.3)
	20代	15 (24.0)	7 (21.2)	7 (35.0)	6 (15.8)
	30代	2 ( 3.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	1 ( 2.6)
	40代	2 ( 3.0)	2 ( 6.1)	0 ( 0.0)	2 ( 5.3)
	50代	2 ( 3.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
	60代	1 ( 1.5)	1 ( 3.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
居住形態	親同居	33 (53.2)	24 (72.7)	10 (50.0)	28 (73.7)
	グループ	22 (35.5)	5 (15.2)	6 (30.0)	9 (23.7)
	入所施設	7 (11.3)	4 (12.1)	4 (20.0)	1 ( 2.6)
就寝部屋	個室	18 (29.0)	18 (54.5)	10 (50.0)	13 (34.2)
	2人	13 (21.0)	8 (24.3)	3 (15.0)	12 (31.6)
	3人	9 (14.5)	3 ( 9.1)	7 (35.0)	8 (21.1)
	4人	22 (35.5)	4 (12.1)	0 ( 0.0)	5 (13.1)
	4人以上	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)

( % )

#### 2 健康状態

健康に関する評価は、生化学的検査等による客観的なものだけでなく、日常生活における自分自身の主観的な判断に基づいても行われている。そこで、表2には主観的健康状態を示してある。男性女性とも「普通」という回答が一番多い比率であった。また、男性女性とも有意な差はみられなかったものの、女性の活動群においては「健康でない」と

表2. 健康状態

		健 康	普 通	健康でない	X <sup>2</sup> 検定
男 性	活 動 群	27	32	3	n.s.
	非活動群	11	18	4	
女 性	活 動 群	4	16	0	n.s.
	非活動群	8	24	6	



回答した者がいなかったのに対し、非活動群では 6 名いた。

人間が健康であるためには、適切な運動・栄養・休養がバランスよく取られていることは自明のことであり、施設入所者の高齢化や脱施設化が進む中、生活習慣病の予防のためにもスポーツ・レクリエーション活動などの身体的活動への参加が重要であると思われる。しかし、ただ単に肥満対策としての参加になるのではなく、あくまでも個人のプラス感情として取り組むことが重要であり、結果として健康の維持・向上にもつながるようにすべきであると考え。

### 3 体力

表 3 には、体力の比較を示している。男性の活動群と非活動群の比較において、5%水準で有意な差が認められた。女性の活動群と非活動群の比較においては、有意な差は認められなかった。

猪飼は、「体力とは人間の生存と活動の基礎をなす身体的、および精神的能力である」と定義している。体力に精神的能力を含めるのは、無気力になった人が病気にかかりやすくなることを考えると、大変意味のあることだといえる。つまり、「体力に自信がありますか」という質問に対して、自信があると回答した者は精神的能力も高いのではないかと推測できる。

表 3. 体力

		自信	普通	不安	X <sup>2</sup> 検定
男性	活動群	23	33	6	※
	非活動群	4	21	8	
女性	活動群	6	10	4	n.s.
	非活動群	7	17	14	

※ P < .05

### 4 活動群における実施活動種目

スポーツ・レクリエーション活動の活動群の実施する活動種目を「レジャー白書」を参考にして、スポーツ部門、趣味・創作部門、娯楽部門、観光・行楽部門の 4 部門に分類してみた(表 4)。男性では、スポーツ部門 11 種目(50%)、趣味・創作部門 7 部門(31.8%)、娯楽部門 3 部門(13.6%)、観光・行楽部門 1 種目(4.6%)の計 22 種目で

表 4. 実施活動種目

	スポーツ部門	趣味・創作部門	娯楽部門	観光・行楽部門
男性	11 (50.0)	7 (31.8)	3 (13.6)	1 (4.6)
女性	8 (57.1)	3 (21.4)	1 (7.2)	2 (14.3)

(%)

あった。女性では、スポーツ部門8種目(57.1%)、趣味・創作部門3種目(21.4%)、娯楽部門1種目(7.2%)、観光・行楽部門2種目(14.3%)の計14種目であった。スポーツ・レクリエーション活動を定期的に行っている者の半数が何かしらのスポーツを行っている。しかし、スポーツを実施している活動群の活動種目については、レパートリーが限られていることが伺える。また、福祉施設においては、その施設職員がどのような活動に力を入れているのかによって、その取り組み活動に大きく影響を受けていると考える。

## 5 活動満足度

男性女性それぞれの活動群と非活動群における活動満足度をみると(表5)、男性の活動群では「満足」と回答した者は29名に対し、男性の非活動群では3名と大きな差があった。女性においては、活動群は6名に対し、非活動群では3名が「満足」と回答した。一方、「不満」と回答した男性の活動群は2名に対し、非活動群では7名であった。女性においては、活動群は0名に対し、非活動群では6名が「不満」と感じていることがわかった。このことから、スポーツ・レクリエーション活動を定期的に行っている者の方が満足していることが伺える。そこで、カイ二乗検定を実施した結果、男性で1%水準、女性では5%水準で有意差が認められ、統計的にも有意な差があることが明らかとなった。

表5. 活動満足度

		満 足	普 通	不 満	X <sup>2</sup> 検定
男性	活 動 群	29	31	2	※※
	非活動群	3	23	7	
女性	活 動 群	6	14	0	※
	非活動群	3	29	6	

※※ P < .01 ※ P < .05

## 6 活動する際の友人

「活動を行う際に友人がいるか」という質問項目に対して「いる」と回答したのは、男性の活動群で男性全体の48%であった。これに対し、非活動群では17%程度であった。これは、スポーツ・レクリエーション活動が集団活動の要素が多く含まれていることが影響していると考えられ、社会参加という点で有効な活動になることが期待される。そこで、カイ二乗検定の結果、5%水準で有意差が認められた(表6)。

## 7 情報源

男性の活動群においては、「友人」が最も多く、「学校職員」「施設職員」と続いた。それに対し、非活動群においては、「学校職員」が最も多く、「家族」「施設職員」と続いた。



表 6. 活動する際の友人

		い る	い ない	X <sup>2</sup> 検定
男性	活 動 群	46	16	※
	非活動群	16	17	
女性	活 動 群	13	7	n.s.
	非活動群	21	17	

※ P &lt; .05

女性の活動群においては、「学校職員」が最も多く、「家族」と「施設職員」と続いた。女性の非活動群においては、「家族」が最も多く、「学校職員」「友人」と続いた（表 7）。

男性女性の活動群、非活動群とも家族や学校職員、施設職員といった身近な存在からの影響が大きいと思われるが、家族が定期的に行っている活動の有無や学校職員及び施設職員がどのようなスポーツ・レクリエーション活動に力を入れているのか、またスポーツ・レクリエーション活動に興味を持っているのかどうか大きく影響されると考えられる。

数多くのスポーツ・レクリエーション活動の情報を提供し、様々なスポーツ・レクリエーション活動を経験することが、その後の活動への参加意欲に影響を及ぼし、スポーツ・レクリエーション活動がライフスタイルに確立すると考える。

表 7. スポーツ・レクリエーション活動に関する情報源

		家 族	友 人	職 員	先 生	社 協	その他
男性	活 動 群	8 (12.9)	16 (25.8)	12 (19.4)	13 (20.9)	2 (3.2)	11 (17.8)
	非活動群	8 (24.2)	3 ( 9.1)	6 (18.2)	9 (27.3)	2 (6.1)	5 (15.1)
女性	活 動 群	5 (25.0)	0 ( 0.0)	5 (25.0)	8 (40.0)	1 (5.0)	1 ( 5.0)
	非活動群	12 (31.6)	8 (21.1)	1 ( 2.6)	9 (23.7)	1 (2.6)	7 (18.4)

( % )

## 8 支援組織の有無

障害者スポーツ・レクリエーション活動を支援する組織の有無をみると（表 8）、男性女性とも非活動群よりも活動群が有意に高い結果となった。そこで、カイ二乗検定の結果、1%水準で有意差が認められた。

安井（1998）は、障害者スポーツ活動の環境について「スポーツをする場所、指導者の不足、参加機会の少なさ、ボランティアなどの支援者の不足、種目・内容の乏しさ」を

表 8. 障害者スポーツ・レクリエーション活動支援組織の有無

		あ る	な い	X <sup>2</sup> 検定
男性	活 動 群	24	38	※※
	非活動群	6	27	
女性	活 動 群	9	11	※※
	非活動群	8	30	

※※ P &lt; .01

指摘している。本研究でも同様に、障害者スポーツ・レクリエーション活動を支援する組織が少ないと感じている者が多いという実態が明らかになり、今後の障害者スポーツ・レクリエーション活動を支援する組織の設立が必要であると考えられる。

## 9 生活の質 (QOL)

### 1) 生活満足度

生活満足度要因として設定した13質問項目により、男性女性それぞれの活動群と非活動群を比較してみた(表9)。その結果、男性においては、活動群が非活動群に比べ、12項目で高い数値を示した。13質問項目のうち3項目で統計的に有意な差が認められた。女性においては、すべての項目で高い数値を示し、5項目で統計的に有意な差が認められた。また、男性女性とも生活満足度全体の平均でも有意差( $p < 0.01$ )が認められた。

「日常生活でどれぐらい、楽しみや娯楽がありますか」という質問では、男性女性とも活動群が非活動群に比べて高い数値で有意差が認められた。また、男性においては、「年を重ねることにより、楽しみや娯楽が増えると思いますか」の質問で有意差が認められた。これは、活動群と非活動群の現状のスポーツ・レクリエーション活動から得られるプラス感情が影響していると考えられる。

ところで、野村(2004)は、「プラスの感情を引き起こすレクリエーションたり得るプログラムが日常生活にあることにより、人間は日々の生活を楽しいものと感じ、明日への期待や生きる勇気をもつことが出来、それが身体的にも、精神的にも、社会的にも価値を生み、そして全人格的な成長へとつながるのである」と述べているように、知的障害児(者)のライフスタイルにプラス感情を得られるスポーツ・レクリエーション活動が定着していることによって、生活満足度を高めるだけでなく、身体的・精神的・社会的・知的にも価値を生み、全人格的な成長にもつながると考える。

### 2) 社会参加・活動

8項目の質問を用いた社会参加・活動による男性女性それぞれの活動群と非活動群を比較してみた(表10)。男性女性ともすべての質問において高い数値を示した。男性においては4項目、女性においては2項目で有意差が認められた。また、社会参加・活動全体の平均でも有意差( $p < 0.01$ )が認められた。

男性女性とも「現在参加している日中の活動は気に入っていますか」の質問で有意差( $p < 0.01$ )が認められ、スポーツ・レクリエーション活動を含む日中活動の満足感や充実感が良い影響を与えているといえる。また、男性においては、「地域の友人との行き来はよくありますか」の質問で有意差( $p < 0.05$ )が認められ、自分が生活している地域での活動を行う機会に影響を及ぼしていると思われる。地域で様々な方と活動を行う機会が

表 9. 性別による活動群と非活動群の QOL 比較

生活の質 (生活満足度)	上段 平均値		下段 標準偏差		t 検定	
	活動群		非活動群			
	男 (n = 62)	女 (n = 20)	男 (n = 33)	女 (n = 38)	男	女
全体として、現在のあなたの生活には。	2.27	2.25	2.03	2.03		
	0.61	0.64	0.68	0.59		
日常生活でどれぐらい、楽しみや娯楽がありますか。	2.27	2.25	1.85	1.71	*	**
	0.66	0.72	0.67	0.73		
年を重ねることにより、楽しみや娯楽が増えると思いますか。	2.31	2.40	2.00	2.03	*	
	0.67	0.60	0.75	0.68		
昔よりも身体の健康に不安がありますか。	2.24	2.10	2.12	2.08		
	0.72	0.64	0.65	0.71		
昔よりも住環境で不自由を感じるがありますか。	2.50	2.65	2.21	2.24		
	0.72	0.67	0.78	0.79		
他の人に比べて抱えている問題は多いですか。	2.21	2.25	2.21	1.79		
	0.74	0.79	0.82	0.81		
1ヶ月に何回ぐらい孤独を感じますか。	2.35	2.25	2.24	1.87		
	0.68	0.72	0.79	0.74		
回りの人は年を重ねることでより大切にしてくれますか。	2.48	2.65	2.21	2.32		**
	0.54	0.49	0.74	0.62		
他人と比べて、よい暮らしをしていると思いますか。	2.37	2.60	2.12	1.97		**
	0.55	0.50	0.74	0.79		
あなたと家族の間はうまくいっていると思いますか。	2.47	2.60	2.06	2.26	*	*
	0.62	0.68	0.70	0.64		
今後、家族との関係は変化すると思いますか。	2.23	2.10	1.97	2.05		
	0.53	0.55	0.68	0.52		
昔よりも生活上の心配はどうですか。	2.10	2.35	1.97	2.05		
	0.72	0.67	0.73	0.61		
悩みや困った時、相談出来る人が身近にいますか。	2.21	2.20	1.94	1.87		*
	0.73	0.62	0.75	0.74		
生活	2.31	2.36	2.07	2.02	**	**

\*\* : p < 0.01 \* : p < 0.05

表 10. 性別による活動群と非活動群の QOL 比較

生活の質 (社会参加・活動)	上段 平均値		下段 標準偏差		t 検定	
	活動群		非活動群			
	男 (n = 62)	女 (n = 20)	男 (n = 33)	女 (n = 38)	男	女
年をとるに従って、やりたいことが出来るようになると思いますか。	2.45	2.45	2.18	2.05		
	0.74	0.69	0.88	0.84		
毎日の作業や活動はあなたにとって、意味があると思いますか。	2.52	2.25	2.09	2.08	**	
	0.59	0.64	0.68	0.67		
現在参加している日中の活動は気に入っていますか。	2.53	2.75	1.91	2.26	**	**
	0.65	0.55	0.72	0.86		
日中活動から得られる技能や経験に満足していますか。	2.29	2.35	1.85	2.05	*	
	0.69	0.67	0.67	0.73		
現在参加している日中活動は誰が決めていますか。	2.31	2.60	2.03	2.32		
	0.80	0.75	0.88	0.81		
昔よりも地域へ出かけることに制限を受けることがありますか。	2.32	2.40	2.24	2.26		
	0.76	0.82	0.87	0.76		
地域の友人との行き来はよくありますか。	1.89	1.65	1.61	1.50	*	
	0.79	0.75	0.70	0.73		
地域へ買物・遊び・趣味等で外出することはありますか。	2.42	2.40	2.21	1.92		**
	0.67	0.68	0.78	0.78		
社会	2.34	2.36	2.02	2.06	**	**

\*\* : p < 0.01 \* : p < 0.05

無いということは、知的障害児（者）本人が自立できる機会を狭めてしまうことにもなりかねないとする。地域のさまざまな方との活動機会が増えれば、活動の範囲が広がるだけでなく、家族と離れて地域の中で暮らす自信も生まれる可能性があるとする。

また、末光ら（2000）の研究でも、「地域の友人との行き来はよくありますか」の質問において、入所施設利用者及び通所施設利用者とも低い得点という知見を得ていて、この知見を一部支持したと言える。

女性においては、「地域へ買物・遊び・趣味等で外出することはありますか」の質問で有意差（ $p < 0.01$ ）が認められた。これは、知的障害児（者）本人の置かれている環境に大きく影響されていると思われる。地域に暮らす知的障害児（者）の世話は、家族が背負っていることが多いため、地域の中に援助してくれる人がひとりでも多くいることが必要である。そのことによって、知的障害児（者）のニーズに応じた外出が可能になり、地域の中でスポーツ・レクリエーション活動を行うことが可能になるといえる。

### 3) 自立・自由度

男性女性それぞれの活動群と非活動群の違いにみる自立・自由度との関連を示した（表11）。男性においては、9項目すべての質問で高い数値を示した。女性においては、8項目の質問で高い数値を示した。統計的には、男性において6項目、女性において4項目で有意差が認められた。

特に、「衣服・装飾品・化粧品・持ち物での制約はありますか」と「嗜好品（たばこ・お

表 11. 性別による活動群と非活動群の QOL 比較

生活の質（自立・自由度）	上段 平均値		下段 標準偏差		t 検定	
	活動群		非活動群		男	女
	男 (n = 62)	女 (n = 20)	男 (n = 33)	女 (n = 38)		
買物の時、お金の使い方は誰が決めていますか。	2.73	2.45	2.36	2.42		
	0.66	0.83	0.82	0.89		
起床・就寝・食事など日常的なことについて、どの程度の決定権がありますか。	2.23	2.15	2.18	2.37		
	0.71	0.93	0.81	0.82		
衣服・装飾品・化粧品・持ち物での制約はありますか。	2.74	2.75	2.24	1.97	**	**
	0.57	0.44	0.79	0.85		
嗜好品（たばこ・お酒・コーヒー等）を適宜に楽しめますか。	2.18	2.30	1.91	1.50	*	**
	0.84	0.86	0.88	0.69		
あなたは保護者ないし後見人を信頼していますか。	2.58	2.85	2.09	2.37	**	*
	0.62	0.37	0.80	0.82		
家族との連絡（外泊・面会・手紙・電話）で制約を受けることがありますか。	2.56	2.80	2.06	2.32	**	**
	0.67	0.41	0.90	0.77		
あなたに危害、迷惑、怒りを及ぼすような人と一緒に暮らしていませんか。	2.61	2.75	2.45	2.53		
	0.64	0.55	0.79	0.73		
これからの生活について自分の意見を聞いてもらっていますか。	2.37	2.40	1.91	1.97	**	
	0.71	0.68	0.72	0.79		
総じてあなたの生活は。	2.73	2.55	2.15	2.08	**	
	0.55	0.51	0.76	0.78		
自立	2.53	2.56	2.15	2.17	**	**

\*\* :  $p < 0.01$  \* :  $p < 0.05$

酒・コーヒー等)を適宜に楽しめますか」の質問における差は、自己決定・自己選択ができる環境及び能力が要因の1つとして考えられる。

自立・自由度全体の平均においても、男性女性とも非活動群に比べ活動群が高い数値を示し、有意差 ( $p < 0.01$ ) が認められた。

#### IV おわりに

本研究では、実際に知的障害児(者)に回答してもらうことによる生活の質(QOL)を測定し、彼らの健康や生活の質(QOL)維持・向上にスポーツ・レクリエーション活動がポジティブな影響を及ぼすことを明らかにし、現状並びに今後の課題などを明らかにすることを目的とした。その研究結果は以下のようにまとめることができる。

- 1) 男性女性とも活動群と非活動群の主観的健康は若干の差はあるものの、有意差は認められなかった。しかし、女性の活動群においては「健康でない」と回答した者がいなかったのに対し、非活動群では6名いた。
- 2) 体力に関する質問において、男性では5%水準で有意差が認められた。
- 3) 活動群における定期的に実施する活動種目を部門別に分類した結果、男性で最も多いのが、スポーツ部門11種目(50.0%)であった。次いで、趣味・創作部門7部門(31.8%)、娯楽部門3部門(13.6%)、観光・行楽部門1種目(4.6%)の順であった。女性においては、スポーツ部門8種目(57.1%)が最も多く、次いで、趣味・創作部門3種目(21.4%)、観光・行楽部門2種目(14.3%)、娯楽部門1種目(7.2%)であった。
- 4) 活動群と非活動群の活動満足度は、男性女性とも非活動群よりも活動群が高く、男性で1%水準、女性で5%水準の有意差が認められた。
- 5) 活動群と非活動群の活動する際の友人の存在は、男性において、非活動群よりも活動群で多く、5%水準で有意差が認められた。
- 6) スポーツ・レクリエーション活動の情報源は、「家族」や「友人」及び「学校職員」・「施設職員」から収集している傾向にあることがわかった。
- 7) 知的障害児(者)がスポーツ・レクリエーション活動を支援する組織が少ないと感じている者が多いという実態が明らかとなった。
- 8) 性別による活動群と非活動群の生活の質(QOL)において、男性女性とも活動群が非活動群よりも高い数値が示され、統計的にも有意差が認められた。

知的障害児(者)を対象とし、主観的測定による生活の質(QOL)の測定を試みた結果、スポーツ・レクリエーション活動の活動群が非活動群よりも高い結果を示し、生活満足度、社会参加・活動、自立・自由度それぞれの全体平均において  $p < 0.01$  の有意差が



認められた。以上のことから、知的障害児（者）がスポーツ・レクリエーション活動を積極的に実施することは、生活の質（QOL）の向上に総体的に寄与することが伺えた。中でも、「日常生活における楽しみや娯楽に関する項目」、「日中の活動に関する項目」で有意差が認められたことは、日常生活に楽しさや喜びが伴う活動の確立が生活の質（QOL）に大きく影響を及ぼすと考える。また、生活の質（QOL）を向上するための活動は、知的障害児（者）自身のニーズに基づいたものでなければならないと考える。

最後に、本研究の対象者を知的障害児（者）としたことに伴い、言語理解及び表出言語が問題となった。今回は先行研究や施設職員及び学校職員に抽出してもらうことによって測定したが、今後は、主観的測定の信頼性をさらに高める測定方法を検討していきたい。そして、知的障害児（者）のスポーツ・レクリエーション活動の重要性を明らかにしていきたいと考えている。

#### 註1) スポーツ・レクリエーション活動

1993年に政府の障害者対策推進本部が決定した「障害者対策に関する新長期計画」において、障害者の文化・スポーツ・レクリエーションの振興を行うこととされている。その項目の1つに、競技スポーツとレクリエーションや交流を楽しめるスポーツの積極的振興と記されている。本論においては、競技スポーツとレクリエーションや交流を楽しめるスポーツとを区別するために、スポーツ・レクリエーション活動と記した。

#### 参考文献・引用文献

- 1) 有馬正高監修：「知的障害を持つ人達の健康障害の実態と対策に関する研究」、日本知的障害福祉連盟、1999、pp.46-47。
- 2) Firth, H. and Rapley, M：「Issues for People with Learning Disabilities」 Acquaintance to Friendship.
- 3) 猪飼道夫：「運動生理学入門」、杏林書院、1969、pp.143-149。
- 4) 河東田博、中園康夫：「知的障害者の生活の質に関する日瑞比較研究」、海声社、1999、pp.75-87。
- 5) Landesman, S：「Quality of Life and Personal Satisfaction: Definition and Measurement Issues」、Mental Retardation、24、1986、pp.14-143。
- 6) 正木基文：「生命予後」、保健の科学、41、(3)、1999、pp.167-171。
- 7) 中澤公孝：「障害者のスポーツ参加」、生涯スポーツ実践論、市村出版、2002、pp.130-138。
- 8) 南條正人、仲野隆士：「知的障害児（者）の生活の質（QOL）に関する研究—知的障害児（者）の居住形態に着目して—」、仙台大学紀要、36、2、2005、pp.11-19。
- 9) 南條正人、仲野隆士、小池和幸：「知的障害児（者）の余暇活動と生活の質（QOL）に関する研究～スポーツ・レクリエーション活動の活動群と非活動群の比較～」、レジャー・レクリエーション研究、55、2005、pp.26-29。
- 10) 野村一路：「障害者におけるレクリエーションの意義」、アダプテッド・スポーツの科学、市村出版、2004、pp.72-76。
- 11) Robert L, Schalock, Kenneth D, Keith, Karen Hoffman, and Orv C, Karan：「Quality of Life: Its Measurement And Use」、Mental Retardation、27、1、1989、pp.25-31。



- 12) 末光茂、笹野京子、菊池達男：「高齢知的障害者の日本版 QOL 質問紙簡易版に関する研究」、岡山県老人保健強化推進特別事業報告書、2000。
- 13) 富安芳和：「グループホームをめぐるサービスシステム」発達障害研究、12 (2)、1990、pp.81-87。
- 14) 角田慰子、池田由紀江：「知的障害者のライフスタイル満足度に関する研究—居住形態からの検討—」、発達障害研究、24、2、2002、pp.149-157。
- 15) 右田紀久恵：「「福祉社会」と地域福祉総合化への途」、ミネルヴァ書房、1995。
- 16) 安井友康：「知的障害者の身体運動の意義」、アダプテッド・スポーツの科学、市村出版、2004、pp.160-163。